インド人の生命観 (1)

——ジャイナ教の生命観——

鷲 尾 倭 文

〔昭和54年9月—55年9月，跡見学園留学制度によるインド留学の研究報告〕

目　次

緒　言
I　ジャイナ教の聖典と論書について
II　Jīva と Ajīva について
III　Paryapti と Prāṇa について
IV　ジャイナ教の生命観
文献および注

緒　言

ジャイナ教 (Jaina, Jainism) はマハーヴィーラ (Mahāvīra, 大勇)，本名，ヴァルダマーナ (Vardhamāna) によって西紀前5世紀頃[1]，ほゞ仏陀と同時代にマガダ国，今日のビハール地方に興されたインド固有の宗教である。仏教が世界的宗教に発展したのに比し，ジャイナ教はインドを一歩も出なかった。信者は主として商工業に従事し，現在なお，全人口の0.5%にあたる300万の信者が宗教的生活を行なっている。

ジャイナ教の教義については後にふれることになるが，仏教と異なる著しい点は苦行によって解脱がえられると説くことである。特に重要なのは五大誓戒で，(不殺生，不妄語，不偸盗，不婬，無所得) 中でも不殺生戒を重んじ，修道僧はもとより，信徒も厳格な菜食主義を守り、土中の虫を殺すことを恐れて農業に従事することも禁ぜられていたほどである。

ジャイナ教の聖典には生命 (jīva) についての記載が多く含まれているが，これを霊魂 (精神作用) として形而上学の立場から考察しているほかに，生物 (jīvadravya, living substance) として取扱い，分類学，生理学，解剖学，発生学などの記載が見られる。その内容は現代の生物学からみれば多分に思弁的で，実証的なものではないが，それは古代ギリシャのアリストテレス (西紀前384—322) の頃の生物学にも通ずることである。西洋ではこれより科学 (science) として現代に至る発展をとげたが，インドにおいては，アーユルヴェーダ (Āyurveda, 寿命の学) として発展し，現在も独得の原理と治療法をもち，西洋医学と並行して治療と研究が行なわれてい

る。

著者はジャイナ教の生命観をその聖典および，その後の文献を通して哲学的，生物学的両面より考察することとした。

I　ジャイナ教の聖典と論書について

伝説によればマハーヴィラーはジャイナ教の二十四人目の祖師といわれているが，彼以前の祖師については第二十三代，パールシュヴァ（Pārśva）を除き，その実在は明らかではない。パールシュヴァについては聖典に彼の教説が記載されており，またマハーヴィラーの五大誓はもとパールシュヴァの四制戒（生物を傷けず。非真実を行なわず。与えられざるものをとらず。他に何物も与えず。）を拡大したものであるとの説もあるが[2]，学者によって意見を異にしている。パールシュヴァはまたニガンタ派（Nigaṇṭha）ともいわれマハーヴィーラがこのあとをついだことになっている。

マハーヴィーラの教説は多数の聖典となって残されているが書物となったのは後代のことで，マハーヴィラーはアルダ・マーガディー（半マガダ語）といわれるプラークリット（俗語）で説法をした。それが口伝によって伝えられ，後にアルダ・マーガディーで記されたのである。現在，ジャイナ教は白衣派（Śvetanvara）と空衣派（Digambara，身に一糸もまとわないので裸行派ともいう。）の二大宗派に分れており，両派によって伝えられるところが異なっている。現在，主に用いられている聖典は白衣派によるもので，空衣派では古い聖典は失われたとしている。白衣派の聖典も現在，存在するものは，マハーヴィーラの滅後980年（西紀5世紀中葉もしくは6世紀初頭）にヴァラビー（Vallabhī）における最終結集によって編さんされたといわれる。その中にはマハーヴィーラの直伝の教もあるが，後になって他の著者らによって新たに加えられた部分も混じっていて，一つの聖典に新旧の断片が入り混じっていると指摘されているものも多い。

ジャイナ教の聖典はアーガマ（Āgama）あるいはシッダーンタ（Siddhānta）といわれ，主要なものが45部あるとされているが，必ずしも絶対的な数ではない。

次に白衣派の聖典の主なものをあげ[3]，そのうち生命に関する記載を含むものにつき，簡単に説明を加えることとする。

1. アンガ（Aṅga，肢分，最も重要なもの）

   12のアンガがあった。最後のアンガにはもと，ジャイナ教の最も古い教義といわれる14のプッヴァ（Puvva）が含まれていたが，現在は散逸して全く存在しない。現在は11のアンガがある。

2. ウヴァンガ（Uvaṃga，副肢）

   12のウヴァンガが存在する。

3. パインナ（Paiṇṇa，雑纂）

10のパインナが存在する。

4. チェーヤスッタ（Cheya-sutta，裁断経）

6つの経典が存在する。

5. 独立経典

2つの経典がこの中に入れられる。

6. ムーラスッタ（Mūlasutta，根本経）

4つの経典が入る。

次に主な経典の内容をのべる。

(1) Āyāraṃga-sutta（第一アンガ）

修道僧の威儀（āyāra）が論ぜられている。主として勧戒と禁戒からなっている。その中に不殺生戒について次のように書かれている。「いかなる生物も，いかなる存在物も，いかなる生類も，いかなる有情もこれを殺害してはならず，虐待してはならず，侮辱してはならず，苦しめてはならず，迫害してはならない。これは世界の実相を体得した聖者たちによって宣説された純粋にして，永遠常恒なる禁戒である。」[4]

(2) Bhagavatī Viyāhapannatti（第五アンガ）

聖典の中で最も重要なものの一つである。ジャイナ教の哲学，歴史がマハーヴィーラとその弟子ゴーヤマ・インダブーティー（Goyama Indabhūti）との会話の形で書かれている。ジャイナ教の文化（政治，経済，社会，教育）について，また宇宙論，天地学，地理学，生物学，数学，論理学，心理学，芸術など，あらゆる部門にわたって記載され，百科辞典的性格をもっている[5]。

(3) Jīvabhigama（第三ウヴァンガ）

jīva と ajīva に関する教説で20章にわたって生類の分類，世界の記述が詳細にわたってのべられている[6]。

(4) Pannavaṇā（第四ウヴァンガ）

これはアッヤ・サーマ（Ayya Sāma）の作と記されている。36章にわたって生物の分類をのべ，人間について地理的民族学的の概説がのべられている[7]。

(5) Taṃdulaveyāliya（第五パインナ）

生理学と解剖学，胎児の生育状態，人生の十期，距離と時間の尺度，骨と腱の数などに関するマハーヴィーラとゴーヤマとの対話である[8]。

(6) Uttarajjhāyā（第一根本経）

36章からなり，さまざまな年代に属する種々の経典を編さんしたものである。その中には弟子に対する教誡，修道僧の耐え忍ばねばならぬ苦労を詳説し，四大事（人間としての誕生，ジャイナ教の聴聞，ジャイナ教の信仰，苦行実践），業と罪悪，聖者の自発的死と愚者の不本意な死，

真実の苦行者と虚偽の苦行者などについて詳述している。これらの中には古い美しい譚詩の形で書かれたものがみられる[9]。最後の第36章には jīva と ajīva についての記載がある[10]。

以上で聖典の説明をおわる。

次に聖典以外の文献についてみると，非聖典文献の作成はすでに聖典が完成する以前から始まり，使用された言語はプラークリット，一部はサンスクリット（Sanskrit）である。初期の作品はプラークリットで書かれ，西紀後，数世紀頃よりサンスクリットが使用せられるに至った。

次に後に引用する主な文献について紹介する。

(1) Pañcatthiyasāra（五原理の精要）

著者はクンダクンダ（Kundakunda，空衣派によれば西紀一世紀頃の人）で彼の著とされる83篇の論の中で，現在その存在が知られているのは7篇にすぎない。「五原理の精要」には五種のアスティカーヤ(Astikāya)，すなわち，存在の聚（あつまり）の教理を説いている。五種とは霊魂（jīva)，素材（poggala)，ダンマ（dhamma)，アダンマ（adhamma)，虚空（āgāsa）である。第二編は解脱への道を論じている[11]。

(2) Tattvārthādhigama-Sūtra（諦義証得経）

著者はウマースヴァーティ（Umāsvāti，空衣派では Umāsvāmin，西紀135—219の人）でこの経はサンスクリットで書かれ，白衣派，空衣派の両派から権威あるものと認められ，今日なお，ジャイナ教徒によって日々読誦されている。ジャイナ教の論理学，心理学，宇宙論，存在論および倫理が本経および著者自身によって添加された註釈において取扱われている[12]。

(3) Navatattva-Prakaraṇa（九諦論）

デーヴァグプタ（Devagupta）の著書で九諦すなわち，九個の根本原理に関する論である。九諦とは霊魂（jīva)，非霊魂（ajīva)，善（puṇya)，悪（pāpa)，漏入（āśrava)，遮（saṃvara)，縛（bandha)，滅（nirjarā)，および解脱（mokṣa）である[13]。

(4) Gommatasāsa，一名 Pañcasaṃgraha（五事綱要）

ネーミチャンドラ（Nemicandra，10世紀末から11世紀初頭の人）の著書で，ジャイナ教の精要を説いた，ぼう大な著作である。霊魂篇（Jīva-Kāṇḍa）と業篇（Karma-Kāṇḍa）とから成り，前篇は生類に関する博物学で，ジャイナ教の宗教，哲学に関するあらゆる内容を含んでいる。業篇は業の性質および業と霊魂との関係を論じている。ネーミチャンドラは極めて博学な著作家でこの他にもいくつかの著作がある[14]。

(5) Jīvaviyāra（生類の探究）

シャーンティ・スーリ（Śāntisūri，西紀1093歿）の作で51の偈頌からなり，生類について論じられている。神学，動物学，植物学，人類学および神話学に関する論書でもある[15]。

(6) Lokaprakāśa（世界の光明）

ヴィナヤヴィジャヤ（Vinayavijaya）の著書で1649年に編さんされたジャイナ教徒の知ってお

かねばならないあらゆる事柄についての広範な百科全書である[16]。

(7) Caraka-saṃhitā（チャラカ本集）

チャラカ（Caraka，2世紀頃の人）は内科医として知られているが，倫理学，哲学にも通じていた。本集の内容は総論，病理，診断，身体，感官の五篇からなり，総論には医学全般にわたるアーユルヴェーダの原理がのべられている。また第三篇には論理学が入っている。本集はアートレーヤ（Ātreya，西紀前5世紀頃の人）が弟子のアグニヴェーシャ（Agniveśa）等に伝えたものをチャラカが増補したものとされている[17][18]。

(8) Suśruta-saṃhitā（スシュルタ本集）

スシュルタ（Suśruta，西紀2—3世紀頃の人）[19]は外科学にくわしく，チャラカサンヒターの内科学中心と対照をなす。内容は総説篇，病理篇，身体篇，治療篇，毒物篇からなり，最後の補遺篇は後に付加されたものである[20]。

最後の(7)，(8)はジャイナ教の文献ではないが後に引用するので取り上げた。

II Jiva[21]（生命）と Ajiva（非生命）について

ジャイナ教ではこの世界を構成する要素として五種の原理をあげる。この世界の外には無限の虚空があり，それを非世界と称している。五種の原理とは jīva（生命または霊魂），poggala（物質または材料），dhamma（達磨，運動条件），adhamma（阿達磨，静止条件），āgāsa（虚空または空間）の五である。jīva は生命あるもので，あとの四原理は ajīva（非生命）と称し，生命なきものを意味する。これら五原理は有聚（astikāya）と称し，有の聚合である。聚合とは微点（pradeśa，空間の一単位）の集合を意味し，物質は原子（aṇu）とその複合（skhanda，蘊合）の二種から成るというジャイナ教の原子説にもとづいている。この五原理にさらに kāla（時間）を加えて六つの実体（dravya）が存在するとされている。

先づ非生命について，ウマースヴァーティの Tattvārthādhigama-Sūtra（以下略して T.S.）第V章よりその特質をのべる[22]。非生命は達磨と阿達磨と虚空と物質からなり，これらは生命とともに実体である。実体は常住であり，無色（一定の形を有しない）である。たゞし物質のみは色すなわち形を有する。達磨，阿達磨（法，非法）は仏教やバラモン教とは意味するところが全く異なり，運動と休止の媒体となることである。虚空の機能は場所を与えることであり，物質の機能は身体を構成し，言語や思考や呼吸作用をおこなうことである。また生命に苦楽を感じさせ，生死を経験せしめる原因となる。時間の機能は事物の存在継続と転変（変化）と運動と，および長短である。物質には原子と蘊合とがある。原子の集合は粘著性と乾燥性によるものである。次の表は非生命の特徴をまとめたものである（第一表）[23]。

こゝでジャイナ教の実体の概念をクンダクンダの著書 Pañcatthiyasāra[24]（以下，略して P.S.），その他の文献からみると，すべての実体は有（sat）であり，性質（guṇa）と様態（paryāya）

第 一 表

Ajīva（非生命）

1 Arūpī（無色）

(1) 達磨の聚合
(2) 達磨の部分
(3) 達磨の微点
(4) 阿達磨の聚合
(5) 阿達磨の部分
(6) 阿達磨の微点
(7) 空間の聚合
(8) 空間の部分
(9) 空間の微点
(10) 時間の微点

2 Rūpī（色）

(1) 蘊（全体）
(2) 蘊分 $\left(\frac{1}{2}\right)$
(3) 蘊点 $\left(\frac{1}{2}の\frac{1}{2}\right)$
(4) 極微（分割しえない）

(1) 色の転変
1 黒色
2 青色
3 赤色
4 黄色
5 白色

(2) 香の転変
1 芳香のある香
2 不快な香

(3) 味の転変
1 苦味
2 辛味
3 収斂性
4 酸味
5 甘味

(4) 触の転変
1 堅
2 軟
3 重
4 軽
5 冷
6 熱
7 滑らか
8 粗い

(5) 形状の転変
1 球形
2 円形
3 三角形
4 四角形
5 長方形

を有する。実体が有であるという意味は生（utpāda），住（dhrauvya），滅（vyaya）の性質を有することである。実体は生ずることもなく，滅することもなく，たゞ，その様態を生じ，かつ，滅するのである。また実体は人為的なものではない。すなわち，その本質において存在するもので，何物によって作られたものでもなく，何物の創造でもない。何となればもし，創造者によって作られたとすれば，その創造者の創造者が存在しなければならず，このようにして無限に創造者を求めねばならぬからである。

次に実体の一つである jīva についてジャイナ教の教説によれば，jīva は霊魂（soul）を意味し，精神作用（upayoga）とも定義されている。

霊魂はあたかも燈火の如く，その微点をあるいは収束し，あるいは放射する（T.S., V, 16)。霊魂は占有すべき身体の大小に応じて如何なる空間にも充満するものである。仏教では霊の存在は認めず，意識あるいは意識の流れを認める。ジャイナ教では死後，霊魂が古い身体をすてて新しい身体に移るのは業身の活動で，解脱せる霊魂は直線的に天頂に進むが，輪廻する霊魂が他の身体に入るときは四回以内の屈折をなす。霊魂が移行している間は肉体は有せず，従ってその間には外界から材料を摂取しない（T.S., II, 26-29)[25]。

さきに実体は性質と様態を有すとのべたが，霊魂の性質は思（cetana）と意料（upyoya）である。そして天（deva）と人（maṇuṣya）と奈落（地獄，naraka）と畜生（tiryagyoni）とが霊の様態である（仏教の四趣に相当する)。身体の主は人態に滅して天神または他のものとなる。しかし霊魂の実在は滅せず，また他として生れもしない。霊魂は死を経験するも滅せず，また生じない。生滅は単に天神あるいは人間と名づける様態である。霊魂は性質と様態に伴われて輪廻

をなす。智を覆う業その他[26]の業によって一定の状態が霊魂に適当に結合する。これを無に帰せしめると解脱者となる。このように霊魂には輪廻者と解脱者の二種があるとせられる[27]。輪廻者とは業(karma)の束縛をうけたもので未だ，解脱に達しないもの，解脱者とは業から解放されて解脱の状態に達したものをいう。ジャイナ教では業は一種の物質的性質を有すとみなされ[28]，業が霊魂に付着することを縛（bandha）と称し，霊魂に流入することを漏入（āsrava）という。漏入した業が汚濁の業身をつくる。苦行によって業を捨離すれば霊魂は何らの重量を有せず，空間の最高処に上昇することになる。業が付着している間は輪廻転生して迷界に束縛されねばならない。如何にしてこの業を捨離するかがジャイナ教の宗教的分野である。白衣派では女性も霊魂が自由の身になれるとするが，裸行派では女性はそのような価値は認められていない。業の漏入を防止するのを遮（saṃvara）と称し，苦行によって業を滅すれば（nirjarā），解脱（mokṣa）をうる。ウマースヴァーティーはこの七種（生命，非生命，漏，縛，遮，滅，解脱）をジャイナ教の根本原理（七諦）としているが，これに善（puṇya）と悪（pāpa）を加えて九種の根本原理をあげるのが一般的である。

さらに生命について T.S.，II，11-25 によれば，輪廻者に意（理性，manas）を有するものと意を有しないものがある。また，動かないものと動きうるものがある。前者には地・水・植物が入り，後者には火・風と二根（感官）以上を具えたものが入る。根（感官）には五種あり，触覚・味覚・嗅覚・視覚・聴覚である。その対象は触・味・香・色・声である。地，水，火，風と植物は一根すなわち触覚のみを有し，虫類，蟻類，蜂類，人類において夫々，一根づつ増加する。

生命の発生様式について次のような記載がみられる（T.S.，II，32-36）。すなわち，凝集生（saṁmūrchana）と胎生（garbha）と突発生（upapāda）である。凝集生とはまわりの物質から肉体身が形成されるもの，胎生とは父親の種子と母親の血液の結合から母親の胎内で肉体身の形成されるもので，これに胞衣生と卵生と裸子生とがある。胞衣生とは人間の子供のように胞嚢に包まれて臍帯をもって生れるもの，卵生とは卵から孵化して生れるもの，裸子生とはライオンや猫の仔のように胞嚢も卵殻もなく生れるものをいう[29]。仏教の胎・卵・湿・化の四生に対比される。突発生は奈落（地獄）住者と神にみられる。天界または地獄において，突然に神などが或る場所に現れるのをいう。それ以外の生命は凝集生に属する。

また発生の場所について九種類に分類される[30]。(1) 腸のような生命あるものの中において発生する（寄生虫）。(2) 生命のない場所に発生する（壁とか机の中から蚊が発生するような場合）。(3) 生命あるものと，ないものの両方において発生する（しらみ）。(4) 冷処に発生する（微生物）。(5) 暖処に発生する（微生物）。(6) 冷暖処に発生する（澱んだ水たまりの中で太陽熱に暖められて蚊などが発生する）。(7) 覆処に発生する（果物などを長期間，覆っておくと腐敗してその中に虫が発生する）。(8) 外気に曝された場所に発生する（一滴の水の中に苔が発生する）。(9) 覆われた場所と曝された場所のまじる処に発生する。

また身体には五身の別がある（T.S.，II，37-49)。肉体身，可変身，取得身，火焔身と業身である。肉体身とは人と動物の身体，可変身は天界と地獄の身体で随意に変化しうるもの，取得身は修道の第六位にある未完成の聖者にあって祥善純粋な身体をいう。また教義に疑問を生じた時，肉体をはなれ，完全智者を訪れ，疑を質して，もとに帰来する身体をいう。火焔身は火の分子からなり，超能力をもった聖者が災害を救い，または怒りをしづめるはたらきをもつ。業身は業の微粒子より形成せられ，死後，他の身体に移る働きのあるものである。この五身は後にのべたものほど，微細で肉体身より火焔身に至るまで無数倍の微点を有し，終りの二身は無限倍である。また終りの二身はその進行において何等の障礙をうけず，宇宙の終端まで進むことができる。生命体は同時に，四個身まで共有することができる。可変身と取得身は同時に具えることができない。肉体身は胎生または凝集生で，可変身は突発生であるが，特殊の苦行をつめばこの世で可変身をうることができる。取得身は聖者にのみ存在する。

次に性別について次のような記載がある（T.S.，II，50-52)。奈落住者と凝集生には性別がなく，神は男性か女性で，その他は三性（男，女，中性）がある。

T.S. 第III章，第VI章，では世界の構造とそこに住む四趣について，また，その寿量についてのべられているが，こゝに取上げる意味が少ないと思われるので略する。たゞ，そこにのべられている心的色彩（Leśya）はジャイナ教の興味ある特徴とみられるので，こゝに取り上げることにする。これは邪命外道[31]の第三祖といわれているマッカリ・ゴーサーラ（Makkhali Gosāla）の六種類の色彩による分類に近い[32]。マッカリの分類は次の如きものである。(1) 黒色種（猟師，屠殺人，殺人，盗賊などの悪行者)。(2) 青色種(仏教の比丘)。(3) 赤色種(一衣をまとうジャイナ教徒)。(4) 黄色種（裸行すなわちマッカリの信徒)。(5) 白色（邪命派の托鉢僧)。(6) 皆色（マッカリ・ゴーサーラなどの三人の邪命派の指導者)。これに対しジャイナ教は黒色，青色，灰色，赤色，黄色，白色の六色で夫々の生命は第二表[33]のような色彩を有する。この色彩は霊魂の道徳的段階を示すもので，業との結びつきの量によってきまる。黒が最も低い段階で最下層の地獄に黒色の生物が住んでいる。白色の色彩をもつものは超自然的な力をもつものである。業がはなれた解脱者には色彩は存在しない。完全智者[34]といえども，この世にあるあいだは白い色彩を有する。また，この色彩は一つの型から他の型へ変化する。しかし，これは人間と畜生の世界においてのみであって，地獄と神々の世界では変化はありえない。また男女の性によって色彩が異なることもある。この色彩は父親や母親と必ずしも同じではない。つまり，それは遺伝的な性質ではない。地獄，火，風，下等物物は灰色より以上には進めない。残りの一感官をもつ生物は黄色以上には進めない。すべての人間と五感官の生物はすべての色彩をもちうることを示している。

以上でジャイナ教における jīva と ajīva についての説明を終わる。

第二表

生命の種類	Leśya（心的色彩）					
	黒	青	灰	黄	紅	白
1 地獄生	○	○	○	×	×	×
2 畜生 ―地	○	○	○	○	×	×
一感官生物 ―水	○	○	○	○	×	×
一感官生物 ―植物	○	○	○	○	×	×
一感官生物 ―火	○	○	○	×	×	×
一感官生物 ―風	○	○	○	×	×	×
二感官	○	○	○	×	×	×
三〃〃	○	○	○	×	×	×
四〃〃	○	○	○	×	×	×
五〃〃 ―凝集生	○	○	○	×	×	×
五〃〃 ―胎生	○	○	○	○	○	○
3 人間						
凝集生	○	○	○	×	×	×
胎生 男性	○	○	○	○	○	○
女性	○	○	○	○	○	○
4 天人						
第一衆 宮住神	○	○	○	○	×	×
〃二〃 中間住〃	○	○	○	○	×	×
〃三〃 星光〃	×	×	×	○	×	×
〃四〃 空行〃	×	×	×	○	○	○
神	×	×	×	○	○	○
女神	×	×	×	○	×	×

Ⅲ Paryapti と Prāṇa について

生物のもつ生命のはたらきをジャイナ教では paryapti[35]（生命力，vital force）または prāṇa[36]（生気，life force）という。paryapti には六種があげられている[37]。

(1) āhāra paryapti[38]：消化に関する生命力。食物の微粒子を消化，吸収し，エネルギーの源になる分子と老廃物に変えるはたらきをする。

(2) śarīra p.[39]：体組識の形成に関する生命力。この力によって栄養素の分子がエネルギーの放出と血液，組識，脂肪，骨，骨髄，精液などの形成に利用される。

(3) indriya p.[40]：感覚に関する生命力。感覚に適した栄養素の微粒子をとり入れて夫々の場所で用いる。

(4) ucchvasa p.[41]：呼吸に関する生命力。呼吸の微粒子をとり入れて，エネルギーをうるために酸化し，二酸化炭素と水にして排出する。

(5) bhasa p.[42]：言語に関する生命力。言語特有の微粒子をとり入れて，それが言語を発する。

(6) manah p.[43]：思考に関する生命力。意識の微粒子をとり入れて，それを意識の作用によ

って変化し，意識すなわち思考の力として発する。
これらの生命力は単一のものではなく生物の種類によって（一感官の生物から五感官の生物に至るまで）その物理化学的な性格が異なっている。

prāṇa には十種がある[44]。すなわち五種の indriya prāṇa（感官の生気），ucchvasa p.（呼吸の生気），āyu p.（寿命の生気），manovakkāya p.（心と言語と身体の生気）の十種である。これらは五種の paryapti と大体において対応する。indriya paryapti は五種の indriya prāṇa に等しく，ucchvasa paryapti は ucchvasa prāṇa に，śarīra paryapti は kāya prāṇa に，bhasa p. は vak p. に，manah p. は manah p. に夫々対応し，これに āyu prāṇa が加わっている。

このように paryapti と prāṇa はほゞ同じ意味をもつものであるが，強いて差をつければ，Gommatasāra によれば paryapti は身体，心，言語および五つの感覚を発達させる能力を獲得させるものであり，prāṇa はそれらの機能を活動させるものである[45]。一感官の生物は四つの praṇa，すなわち触覚と呼吸，寿命，身体の prāṇa をもち，二感官の生物は六つの prāṇa，すなわち前の四つの prāṇa に味覚と言語の prāṇa が加わり，三感官の生物は七つの prāṇa，すなわち，さらに嗅覚が加わり，四感官の生物は八つの prāṇa，すなわち，さらに視覚が加わる。理性をもたない五感官の生物（asamjñi）は九つの prāṇa をもち，理性をもつ五感官の生物(samjñi)は十種の prāṇa をもつ[46]。

アーユル・ヴェーダ（Āyurveda，インド古代医学）においても prāṇa という語が用いられている。アーユル・ヴェーダでは三つの生命の基本的要素(トリドーシャス，tridoṣas) として vāyu (風)，pitta（胆汁）と kapha（粘液）をあげる。その一つ，vāyu に五種ありとする[47],[48]。それらは prāṇa, udāna, samāna, vyāna および spāna である。prāna は口を通してはたらき，嚥下，しゃっくり，呼吸などのはたらきをする。udāna は言葉を話し，歌うことに関与し，samāna は胃にあって食物の消化に関与し，vyāna は血液の循環や発汗に関与し，spāna は腹部にあって泌尿生殖器の分泌に関与している。チャラカは vāyu を生物の種々のはたらきを起す力としている[49]。それは細胞や組織を形成し，また受精卵から特定の形態を発生させるはたらきの源である。したがってジャイナ教の prāṇa はアーユル・ヴェーダの prāṇa よりも広い範囲の vāyu に近いものをさすが，全く同じ意味とはいえない。アーユル・ヴェーダの vāyu は他の二つのドーシャとともに，より具体的な体の構成要素を指している。三つのドーシャが正常な平衡状態にあれば健康であり，平衡を失うと病気になるとされている。これに対しジャイナ教の prāṇa，または paryapti は抽象的な性格が強い。

Ⅳ　ジャイナ教の生命観

ジャイナ教の生命の概念には古い時代の特徴として生物学的，心理学的，倫理宗教的思想が渾然一体となっている。これは古代ギリシャ哲学にみられる生命思想とも類似するところであ

る[50]。

次にさきにのべた生命についての記載の中から，生物学的分野に入るものと，哲学宗教的分野に入るものとを分けてみる。

A 生物学的立場からみた生命について

(1) 生命の中に地，水，火，風，植物，動物，人間がふくまれる。これを動かないものと動きうるものに分ける。動かないものに地，水，植物がふくまれ，動きうるものに火，風，動物，人間が入る。

(2) 生物のもつ感覚を五種（触覚等）とし，地，水，火，風と植物は一根（触覚）のみを有し，動物は二根以上を有し，人間は五根を有する。

(3) 動物を発生の形式によって突発生，凝集生および胎生の三種に分つ。胎生をさらに胞衣生，卵生および裸子生に分つ。

(4) 生物を発生の場所により九種類（寄生，腐生など）に分つ。

(5) 性別について男性，女性の他に中性をおく。

B 哲学，宗教的立場からみた生命について

(1) 生命は身体に霊魂の宿つたもので，死ぬと霊魂は身体から出てゆく。

(2) この時，業の付着した業身から出た霊魂は別の身体（輪廻身）に入るが，業のはなれた身体（解脱身）から出た霊魂は天上に昇る。

(3) 霊魂は実体であるから，生住滅の性格を有し，様態としては四種（天，人間，奈落，畜生）に分れる。

(4) 身体には五身（肉体身，可変身，取得身，火焔身，業身）の別がある。

以上ジャイナ教の生命観の特徴をまとめてのべると，生物学的立場によってみると，生命あるものに地，水，火，風が加えられているが，これは人類の古い時代から見られるアニミスティックな思想である。しかし生物の運動性，感覚，発生様式，発生の場所などについては生物に関する事実として現代生物学に通ずるものである。Ⅲにのべた生命力（paryapti, prāṇa）はギリシャのアナクシメネス（B.C. 545 頃に活躍）のプネウマ（pneuma）あるいはアリストテレスのエンテレキー（entelechi）に対比することができる。生物のあらゆる現象をおこす源として生物のみがもっている特殊な力をみとめる点で生気論（vitalism）の立場ということができる。

次に霊魂について，生命は身体に霊魂が宿つたもので死ぬと霊魂が身体をはなれる。霊魂をも実体とみる点において二元論的実在論といえる。霊魂はまた精神作用（upayoga）と考えられ，知識をうるための活動（認識作用）である。この作用は下等な生物にもあるが，そのはたらきは小さく，夫々の生物に応じて次第に高等になり，完全智者において最高である。ジャイナ教においては智は霊魂の重要な本質であり，それは感官智（感官すなわち五根と意根を通して得られる智），聖典智（聖典を聴くことによって得られる智であり，感官智に基づいて発生する），直観智

（感官によらず，直接的に事物を把握する智で天界や奈落に住する者にそなわる），他心智（他人の心を直覚する智で聖者のみが所有できる），完全智（愚痴業，智と見の覆障業，および妨害業の滅尽によって得られる絶対的な智で解脱者が所有できる）の順ですぐれた霊魂の状態になる。完全智者において解脱に入ることが出来る。ジャイナ教の身体と霊魂の関係は宗教的には霊魂が業に束縛されているあいだは輪廻をくり返すが，苦行によって業をはなれると霊魂は解脱して天に昇る。したがってジャイナ教は身体と霊魂の完全な分離を終極の目的とするものである。

文献および注

(1) 生存年代については諸説がある。宇井説によれば B.C. 448-376
(2) 金倉圓照「印度古代精神史」岩波書店（1938）p. 220
(3) M. Winternitz; Geschichte der indischen Literatur, Bd. II，中野義照訳「ジャイナ教文献」日本印度学会（1976）pp. 7-12
(4) 同上，p. 20
(5) J.C. Sikdar: Studies in The Bhagawatīsūtra, Bihar (1964) p. 1
(6) 中野義照訳「ジャイナ教文献」p. 43
(7) 同上，p. 44
(8) 同上，p. 50
(9) 同上，p. 58
(10) H. Jacobi: SBE, vol. XLV pp. 206-232
(11) 中野，前掲書 p. 204
(12) 同上，p. 207
(13) 同上，pp. 217-218
(14) 同上，pp. 215-216
(15) 同上，p. 218
(16) 同上，p. 224
(17) M. Winternitz: 前掲書 Bd. III，中野訳「インドの学術書」日本印度学会（1972）p. 193
(18) 宇井伯寿「印度哲学研究第二」岩波書店（1965）p. 427
(19) 生存年代については諸説がある。
(20) 中野訳「インドの学術書」p. 195
(21) 活命，命我とも訳されている。
(22) 金倉圓照「印度精神文化の研究」培風館（1944）pp. 150-160
(23) N. J. Shah: Paṇṇavanāsuttaṃ pts. 2 (Jaina-Āgama-Series 9), Bombay (1971), Introduction Chap. 1, p. 242
(24) 金倉「印度精神文化の研究」p. 260
(25) 同上，pp. 117-128
(26) 八種の業があげられている。すなわち智の覆障業，見の覆障業，感受業，愚痴業，寿量業，個性業，類性業，妨害業の八種である（T.S. VIII, 5 による）。
(27) 金倉「印度精神文化の研究」p. 118
(28) D.L.T. Shah: Jain Dharma Sāra, AJMER, (1965) pp. 191-195
(29) J.L. Jaini: Tatvārtha Sūtram, Delhi (1956) p. 51
(30) Ibid., p. 50
(31) 六師外道（仏教の教説と異なる説をとなえた六人の思想家）の一人

(32) 金倉「印度古代精神史」p. 203
(33) N.J. Shah : 前掲書, Introduction, Chap., XVII, p. 351
(34) 最高の段階の智を有するもので，業の滅尽によって到達することができる。
(35) Navatattva-Prakaraṇa (九諦論) v. 6
Gommatasāra, Jīvakāṇḍa (五事綱要，霊魂篇) vv. 118-119,
Lokaprakāśa (世界の光明) pt. 1, 3rd sarga, vv. 15
(36) Jīvaviyāra, vv. 42, 43
Gommatasāra, Jīvakāṇḍa, v. 129
(37) Navatattva Prakaraṇa v. 6
Lokaprakāśa pt. 1, 3, vv. 15
(38) Lokaprakāśa pt. 1, 3, 17
(39) Ibid. p. 65
(40) 〃 p. 65, 66
(41) 〃 p. 66
(42) 〃 p. 67
(43) 〃 〃
(44) Jīvaviyāra, vv. 42, 43
(45) Gommatasāra, Jīvakānṇḍa, p. 90
(46) Jīvaviyāra, vv. 42, 43
(47) Caraka-saṃhitā, Sūtrasthāna, ch. XII
(48) Suśruta-saṃhitā, Nidānasthāna, ch. I
(49) Caraka-saṃhitā, Sūtrasthāna, ch. XI
(50) C.U.M. Smith : The Problem of Life, 八杉龍一訳「生命観の歴史」上，pp. 61-65